

昭和五十二年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四

電話(03) 37714649

FAX(03) 37714649

振替 東京0158431 労金 東京労金本店 No.50234

〈もくじ〉

■ 巻頭言 ■

真価問われる社会党

参院での与野党逆転にあたって

拒否された「永田町政治」の論理

——われら今、何をなすべきか(一)——

日教組、新「連合」に加盟を提案

資料1 労働戦線の統一に関する件(案)

国労闘争前進のために

——国労をめぐる情勢と課題——

「闘って良かった」といえる日をめぐって

——昭和電工・千葉の仲間からの報告(一)——

◇投稿◇ 新潟の仲間の闘いに学ぶ

読者からのおたより

編集部だより——読者をご紹介ください

2

3

8

8

10

13

16

18

# 旬刊 社会通信

NO. 411

一九八九年八月二日

一九八九年八月二日発行

(毎月一日・二日・三日三回発行)

## ■ 巻頭言 ■ 真価問われる社会党

参院での与野党逆転にあたって

二三日夜、本誌の構成作業のなかで、参院選のニュース速報を聞いた。保「革」逆転は、ニュース開始後の一時間後確定した。新潟参院補選、都議選の流れが大河となった。勤労諸社会層は、自民党政治の腐敗、消費税、農産物自由化に「だんこノノ」の意志を表明したのである。詳細な分析は次号に譲り、思いつくままその感想を書く。

第一に選挙結果の背景だ。自民党一党支配構造、支持基盤の根本的動揺である。一つは「リクルート疑獄」で暴露された自民党・財界のゆ着と政治腐敗、自民党が自浄能力を喪失したことへの国民的批判だ。正義感の強い若者、婦人層が自民党から離反した。各種の世論調査がこれを示す。ふたつは消費税への怒りだ。これは、自民党のもっとも強固な支持基盤であった小生産者層、年金生活者、中小企業労働者、主婦層の激的な「自民離れ」をもたらした。みつつは農産物自由化にともなう農民の「反乱」だ。二六の一人区で自民が完敗したことが、その象徴だ。その他、土地・住宅・教育・医療、福祉等その矛盾は数限りない。これらの矛盾に、三つの要因が火をつけ、一挙に爆発したのである。

第二に今後のわれわれの進路だ。前号でも伝えたが、現情勢と職場状況に違和感が大きい。この違和感をどう克服するかが最大の課題となろう。ひとつは、大衆運動の強化に全力をつくすことだ。社会党、連合には大衆運動を拒否する傾向が強い。しかし、国民大衆の声に背を向けて彼らは生き残れない。これは大衆運動を起す絶好の要素となる。ふたつは、今度の選挙で示した勤労諸階層の政治浄化を求める声を労働組合にもちこむことだ。今回の労戦再編論議がその典型だが、その論理は「永田町政治」と変わらない。日教組の仲間の活動はその端初となろう。みつつは、視野を広く大きくもつことだ。歴史はわれわれの期待どおりには動かない。自民党の支持基盤からわきおこった「反乱」を組合強化の糧とすることである。これらの闘いが合いまって連合を克服する力をつくり出し、社会党を真に国民が期待する党とする。

第三に、政局の動向だ。与野党逆転は、消費税廃止法案提出以外、野党に方策がないことを示す。ひとつは、社会党の責任が決定的に重大となったことだ。ふたつは、民社、公明をめぐり自民と社会の綱引きが強まることだ。みつつは、したがって、こうした状況下、野党が消費税廃止を決議できるかどうか。

第四に、衆院解散総選挙だ。野党が消費税廃止決議をおこなったとき、衆院はその賛否を問われる。そのとき、衆院解散は必至となる。「反自民」が大河となった今日、衆院での与野党逆転も100%確実だ。

第五に、連合の進出、共産の惨敗をどうみるかだ。連合には「ぬれ手にあわ」のことがよく似合う。追い風に乗ったからだ。岡山で社会党が勝ったことがそれを示す。だが、連合が労働界の四番バッターとなった今、本誌第四一〇号で紹介した「労働界全体の統一にむけての党の対応」に明らかのように、社会党への介入をさらに強めよう。このとき、左派党員の態度が問われる。共産党の敗北はこの党の独善的、官僚的体質の「ベレストロイカ」が必要なことを示す。

日本の政治は予想外の局面に一挙に突入した。どこかの新聞の「声」欄に、「リングに押し上げられた社会党」が掲載されていた。社会党、そして党内左派勢力の真価が問われるのは、これからである。

(七月二三日・T)

## 拒否された「永田町政治」の論理

——われら今、何をなすべきか (二) ——

### 予想を上まわる大勝

七月二日、投票。七時ニュースで、投票率五八%、前回比五%上昇。内訳、女性六一%、男性五六%と報道。女性投票率は、男性を5%上まわり、全都投票率を引き上げた。すでにこの段階で、社会党勝利は確実であった。

三日、広田選挙事務所待機。九時開票。九時半、早くも勝利は確定した。結果は、広田三万四千票、得票率三一%、第一位当選。練馬佐々木は実に九万二千票取り、全都第一位であった。予想をこえるなだれ現象であった。社会党は、推薦無所属を含め、三六名。前回の三倍、得票率二九%、結成以来、最高の得票率である。自民党は一九議席を減らし、得票率三一%。公明、共産は得票率、議席数を減らし民社は、議席、得票率微増である。

この結果は、自民党首脳、財界に深刻な衝撃を与え、七月二〇日、参院選挙後、宇野総理退陣が検討された。自民党政権基盤は、なだれをうって崩壊していることが実証された。この情勢は、参院選で変えることは、不可能にちかい。我々は、急激に進展する情勢に遅れることなく、今おきている現象の本質をしっかりとつかみ、衆議院を解散においこみ、自民党一党独裁の権力構造を根底から、破壊しなければならぬ。

### 反自民、新しい政治を求める都民

そのため、いまなすべきことは、いま何がおきているのか、都議選の総括を含めて、激動する情勢の正しい分析である。都議選直後、全都で都議選をたたかった実務担当者を中心に、同志が集り、選挙分析を行った。

得票率は二九%であるが、社会党候補をたてなかつた台東、墨田を除くと、得票率三一%弱、自民党と同じである。とくに党公認新人一八選挙区平均得票率は三四%強、推薦新人六選挙区平均二五%強を大きく上まわっている。

反自民の票は、無所属よりも、はっきりした社会党に、女性候補と共に、新人に結集していることが特徴である。このことは、自民党が二名ずつせり合ったところでは、新人が当選したことに現れている。都民は、反自民、既成政治の枠を突破したものを求めている。社会党が、この要求を組織し、反独占、反自民のたたかいを組織できるなら、自民党支持基盤をさらにうちくずすことができる。それができなければ、六五年、四五名当選させ、都議会第一位になったにもかかわらず、次の選挙では、一挙に二二名に半減し、長期低落を辿ったのと、同じ運命におち入ることになる。社会党ははたして、二五年前犯した失敗を克服できるだろうか。

### 選挙闘争の諸特徴

今次都議選を総括して、第一に政策についてである。全地区にわたり、政策の焦点は、消費税である。都民は、都議選、参院選、衆院選の連動を明確につかみ、消費税廃止を求めて、

社会党に投票した。その反応は、商店街で強く、自民党支持商店会の、支持取り消しも相ついで生じた。社会党宣伝カーに手を振って応えるなど、かつてないことであった。しかし労働者の反応は、最終に至るまでによく、選挙直前まで、団地等の手こたえはうすかった。第二に、味方の活動である。社会党総支部を中心とした活動は、前回に比べ低下している。港等では、労働者選対に党員は従属し、党機関独自活動はない。左派系執行部を選対から排除してたかかった区もある。三多摩では全電通等、連合候補に集中し、社会党機関無視の行動も行なわれた。特定区を除いて、社会党機関は、このような外来労働者部隊をもその指導下に入れ、活動する力量をもっていない。

その労働者選対の力量も、前回に比べ、六〇―七〇%ちかくまでおちこんでいる。連合支配下の労働者が動かないだけではない。左派系労組も、国労等を除いては、行動力がおちこんでいる。その結果、つぶし、投げこみに大きな支障をきたした。

最後に他党の動きで特徴的なのは、共産党である。この党は、社会党、とくに豊島・広田等左派にまとをしぼって攻撃した。その結果、社共共闘を願う良心派は、逆に共産党から離れ、社会党は、左右両派、反日共で結集するという皮肉な結果を産んだ。共産党の敗北は、天安門弾圧の影響だけではない。統一戦線の原則にたちかえらねば、この党の孤立・衰退は目に見えている。統一労組懇を母胎とするナショナルセンター設立を急ぐことは、危険である。国民から孤立し、弾圧を集中させることになりかねない。左派との共闘をおくまで追求し、反独占、反自民の戦線を拡大、強化すべきではないのか。

### 三倍の票、衰退する内実

以上明らかなように、冒頭提起した「ねじれ現象」が、今次都議選の特徴となっている。自民党を離れた票は、婦人層、商店街層を中心に、社会党に集中した。しかし、社会党を支えてきた中心部隊、労働者の反応は、よく、動員力が低下しているという事実である。一五〇万票、三六議席、前回に比べ三倍の議席と票を獲得した。しかし、その主体、党の各総支部機関、労働者選対の力は、前回に比べても、衰退しているのである。六五年以降続いている長期低落の傾向は、主体の面からみれば、とまっていない。

この社会党が、なぜ、前回に三倍する票を獲得したのか。消費税を頂点にした年金、土地高騰等一連の生活破壊の政策、リクルート、女性蔑視を発火点に爆発した、成熟した市民社会の倫理、論理が、前時代的な自民党を拒否したのである。消費税は最大の問題であるが、それだけではない。公約を無視したそのやりかた、陰湿な永田町の論理を都民は拒否したのである。ここに、一時的ではない、構造的変化の兆候がある。

この票が、土井たか子を先頭にして、反消費税をたたかった社会党に集中した。党首が、リクルート、明電工に汚染され、消費税導入では、自民党に手を貸した公明、民社党に票は流れなかった。それだけではない。土井たか子は、ものごとをあいまいにしない、はっきりとした判断を示す。待合、料理屋、密室政治はできそうにもない。ここを見落してはならないと思う。永田町感覚、腐敗し、息のつまりそうな古い政治屋の世界を、都民は、はっきり拒否しているのである。土井たか子を先頭にした社会党は、内実はともあれ、この市民感覚を吸収したのである。生活を破壊された都民の怒りを吸収したのである。

その社会党の内容はどうなのか。最大の弱点は、社会党を支えてきた労働者層である。

「会社の門を入れば、民主主義はない」といわれるほど、労働者の諸権利は剝奪されてきた。思想・表現の自由は犯されてきた。組合幹部は、資本といっしょになって、権利侵害をすすめてきた。系統的、組織的思想攻撃をすすめてきた。企業主義、競争主義が、労働者の頭脳を犯してゆく。労働者は消費税、リクルート、女性問題についても良いとは思っていない。しかし、会社ではもっとひどいことが、まかり通っている。市民社会の論理は通用しない。このような、労働者の職場、組織、ものの考えかたを、変えてゆかないかぎり、社会党を基本的に強化することができない。自民党を拒否し、社会党に結集した層は、再び、社会党を離れる。我々は、ここにメスを入れ、「ネジレ」を正すために、全力をつくさねばならない。

### 「連合」党派とは何か

基本問題を追求する前に、このように日本の労働者運動を破壊し、社会党を弱めた、「連合」の危険な動向について、はっきり、つかんでおく必要がある。

今次参議院選で、「連合」は、一二人の候補者を出している。七月八日、豎山「連合」会長、石田・公明党委員長、永末・民社党委員長、江田・社民連代表は、岡山に集り会談。岡山武道館に五千名集め、高原「連合候補」の応援演説をした。彼等は、社会党が岡山で、独自候補森をたてたことを非難し、社会党は安保条約、原発を容認し、現実政策に転換し、「連合」会派を強化すべきことを主張した。「連合」は参院地方区に一二人の候補をたてている。当選議員は「連合」会派をつくる。この動きは、つづいて行なわれる衆院選挙に連動する。社会党つぶし、「連合党」をつくるのが、彼等の主張である。このことは、五月二四日発表の「連合」の綱領、活動のありかた、に明記されている。

その方針は、巨大資本の方針と異なるところはない。安保、自衛隊、原発容認、農産物自由化賛成、消費税は廃止ではなく、みなおしである。岡山では、社会党が、独自候補をたてたので、その対比は明確である。しかし、その他一名については、社会党は、公明、民社、社民連と共に、「連合」候補を推せんしている。社会党に対する国民の期待は大きい。社会党が推せんしているというだけで、「連合」候補は、相当多数当選するかもしれない。しかし、社会党は、取りかえしのつかない打撃をうけることになるだろう。国民が社会党に期待するのは、消費税廃止、農産物自由化反対である。永田町論理、前近代的な政治の廃止、市民社会論理の通貫である。「連合党」は、どのひとつをとっても、この期待を踏みにじる。この「ネジレ」は、社会党にとって自殺行為となる。

### 社会党再生の道

社会党は、総評を中心とする日本の労働者、知識人と共に生きてきた、総評は、さまざまな弱点をもちながらも、戦争と平和、日本の重大危機に当っては、全国民の先頭に立ってたたかってきた。一人一人の労働者も、自覚と誇りをもって、職場、地域でたたかってきた。ブルジョア民主主義にとどまらず、社会主義をめざす労働者、活動家の集団も生まれてきた。進歩的知識人、市民運動も、労働者を中心として、たたかいに結集した。

この総評が、反合理化職場闘争の衰退、能力主義管理、「連合」幹部の裏切り等により、七〇年代から衰退の道を辿る。それと歩みを同じくして、社会党が長期低落してゆく。そ

して、今回、社会構造の転換をつかみ切れず永田町の論理に安住した自民党は、国民に拒否された。リクルート、消費税、農業政策が発火点となったが、それだけではない。永田町論理に代表される、前近代的政治体質を拒否する市民社会、市民感覚が成長し、普遍化してきたのである。

この層が、婦人層を先頭にして、小生産者、商店街、農民層をまきこんで、社会党に結集したのである。社会党は、この人々により、起死再生の転機をつかんだ。いま重要なことは、この層の論理、要求を組織化すると同時に、この市民社会の論理すら破壊され、合理化にさらされている、労働者階級の復権、再生強化に手を貸すべきではないのか。過去数十年、社会党を支え、共に生きてきたのはこの職場の労働者ではなかったのか。

しかし、いま、社会党は、全くちがったことをやろうとしている。社会党を支え、たたかってきた、労働者を、資本と共に弾圧し、権利を剝奪してきた、「連合」幹部に手を貸している。これは、社会党にとって自殺行為ではないのか。敵に手を貸すことではないのか。社会党を救った新しい層と、「連合」の政策、幹部の思想、行動は、鋭く対立する。社会構造の転換、市民社会の成熟は、新しい層をさらに拡大する。これをつかみ切れなかったのが、永田町論理である。この論理にどっぷりつかり、政策、行動、思想ともに資本、自民党の垂流である、「連合」に未来があるわけではない。半自民党とみられ国民の支持を失いつつある公明、民社は、「連合」にしがみつき、社会党をまきこんで、党の再生を計ろうとしている。これにひっぱりこまれることは、社会党にとって、自殺行為以外のなものでもない。

党の政策、支持基盤を対立、抗争させてはならない。分裂させてはならない。新しい支持層は、社会党をみはなし、逃げさるであらう。社会党再生の道は、この新しい層の要求を組織化し、これと対立する「連合」幹部と訣別することである。彼らはより弾圧され合理化攻撃にさらされている職場労働者の人間としての復権、再生強化に、全力をつくして取り組むことである。彼らは再び、日本の社会の民主化、近代化の中心となり、市民運動、婦人運動と提携し、反独占、反自民のたたかいをつづけるだろう。

### 我々は何をなすべきか

今次、都議選、参議院選挙で、いわゆる活動家層の動きは鈍かった。協会員、同盟員も激動する情勢の本質をつかみ切れず、立ち遅れていたことは事実である。それは単に情勢をつかみ切れないというだけではなく、圧倒的に多い右派系候補者擁立、自社公認推せん候補、田英夫や連合候補推せん等、社会党指導部の「ネジレ」にどう対処すべきか、明確な指針を出し得なかった、指導部の責任によるところが大きい。早急にこの遅れを取り戻し、消費税粉碎、国会解散、総選挙闘争に取りくまねばならない。

このたたかいの中で、我々は、「ネジレ」の克服、反連合、職場労働者の強化を、第一の課題として取り上げねばならない。社会党を支持する新しい層を、居住支部、後援会に組織化する中で、我々は婦人層、商店街層等反自民のエネルギーを、肌でつかみ、吸収することができる。

しかし、それだけでは党は強化されない。労働者選対、職場支部の建設が、最重要課題である。六五年九月出された指令第四号を、いま再読して、追求すべきであらう。「反合理化できたえ上げられた労働者が、地域闘争の中心となる」という指令第四号の精神は

いま新しい光をはなつている。

八九年一月二日、総評は解散して、「連合」が成立する。五月二四日公表した連合綱領、規約、活動のありかたは、九月末で、官公労働組合によりぞくぞく批准されようとしている。このとき、労働組合を具体的戦力として組織化できるものだろうか。活動家の中でも迷いは深い。

しかし、このことはやりとげねばならないし、決して不可能ではない。東京都議選、豊島区では、既述のように、電通は公明党を推せんし、広田に攻撃を加えてきた。全通は、「連合」賛成を条件とした。しかし、国労、清掃、建設等の左派系組合はもちろん、右派系といわれる日通、東交も職場支部として、労働者選対を構成し、活発な運動を展開した。都税、区職、オリヂン等民間中小組合活動家も目を追って拡大し、全通も条件を保留して労戦に参加してきた。

合理化攻撃が強まり、右翼労戦再編の中で、職場労働者の幹部不信は強い。しかし、職場支部、分会指導部は、特異な組合を除いて、職場組合員と密着せざるを得ない。この中間指導部の活動家が、展望をもってやる気になれば、組合員大衆は活力をとりもどす。左派も右派も職場組合員のおかれている状況に大差はない。結集した労働者は誠実に組織的に奮闘した。

とくに、党建協事務局局長、反連合の広田を当選させるため、左派系活動家は、全都から結集した国労を中心に、電通、全通、教組、民間各組合労働者の奮闘は目をみはるものがあった。活動家の自覚と指導性が決定的役割りを果たす。「連合」成立という、逆風の中でこそ、職場支部建設を追求しなければならない。その成否は、一にかかって活動家の自覚と奮闘による。

社会党機関の強化は、職場支部、居住支部強化、職場・地域の具体的課題、全国的課題の大衆闘争の中で達成される。都議選、そして、いまたたかっている参議院選も反自民、反消費税の国民大衆の怒りを組織化して、はじめて社会党は勝利する。

右派当選者もこのことは、痛感している。当選したいなら、反消費税、反農産物自由化、反原発の旗をおろすことはできない。かつてない好機である。全情勢をしっかりとつかみ、大衆に密着し、確信をもってたたかいをすすめよう。

「連合」の未来をたち切るために

自民党離れは、一挙にしておきたものではない。長期にわたる一党独裁、独占擁護、勤労者抑圧政策、永田町論理は、国民各層の生活を破壊し成長する市民感覚との対立を深めていた。不満不信感は累積されていた。これが、リクルート、消費税強行により点火され、一挙に爆発したのである。

事物の発展は、必ず量から質に転化する。「連合」に対する組合員の不信は強い。当初はこれに反対し、五項目、三課題等条件を設定しながら、いまこれを、全く弊履のように投げすてる組合指導部に対する不信は、累積されている。しかも、率直にものをいわない。永田町論理に類似する詭弁で、組合員をまるめこもうとする。その思想、行動は前近代的那种外はない。

このような論理、思想行動は、一般の市民社会ではもう通用しない。我々が職場支部を

建設し、反合理化、反連合の闘争を追求してゆくなら、必ず量は質に転化する。「連合」指導を破壊し、職場労働者の解放をかちとることは必ずできる。とくに首都東京では、都労連二〇万が「反連合」の旗じるしを掲げ、六月定期大会では「国労と共に全労協結成に奮闘する」ことを決定している。首都最大の労働組合、一三万都職労は、そのたたかいの中心となる。国労東京一万二千名も健全である。この力が中心になり右派は、東京地評を解散させることができない。東京各ブロックの労研センターを強化し、「全労協」準備会を結成してゆこう。すでに「連合」に参加している組合の仲間は、職場支部をつくり、このような拠点と密接な連絡をとりたかたゆこう。必ず展望は開ける。

解散総選挙で、自民党が過半数をわれれば、公明、民社は動揺する。民社は、自民にひきづりこまれる可能性がある。このとき、「連合党」構想は崩壊する。社会党の勝利を確実にし、消費税粉碎、反独占国民連合の方針を堅持し、たたかてゆこう。(坂牛哲郎)

## 日教組、新「連合」に加盟を提案

日教組は九月開催予定の第六八回定期大会に提案する運動方針案をまとめた。注目の労戦統一問題についての別号議案「労働戦線統一に関する件(案)」で、第一五回首脳会談の合意事項である「連合の進路」などの統一案を全面的に支持、新「連合」加盟を提案した。

同方針は資料に掲載した「提案理由」と「提案事項」からなる。また、「労働戦線統一にかかわる総括」(一九八八年度たたかひの総括(追加))は、経過に対する評価と課題で、統一労組懇・全国教職員あり方懇の行動を強く批判しているのが特徴である。

### 資料1 労働戦線の統一に関する件(案)

#### 〈提案理由〉

(1) 今日、わたくしたちをとりまく情勢は、政府・自民党と財界が一体となってすすめている「戦後政治の総決算」路線と、産業構造の変化によって、勤労国民の生活と権利が大きく侵害され、平和と民主主義、民主教育が重大な危機にさらされています。

したがってこの状況を克服するためには、官民の労働者が相互に胸襟を開いて、それぞれの課題を理解し、かたい意思統一にたつて、賃金・労働条件の改善、制度・政策課題の実現をはからなければなりません。そして、すべての労働者・労働組合が総結集し、共同行動をつよめつつ、資本と権力の一体的攻撃をのりこえることがきわめて重要です。

そのためにも、一國一ナショナルセンターの組織原則にもとづき、わが国統一ナショナルセンターの結成は不可欠といわなければなりません。これまでの経過と現状、今後の対応で明らかのように、日教組の統一と団結を大事にしつつ、すべての労働者・労働組合の大結集による統一ナショナルセンターの形成が緊急に求められています。

(2) 今日、戦後民主教育の総決算路線が進行するなかで子ども・青年たちは、受験地獄、登校拒否、暴力など、出口のない苦しみと悩みにおちいつています。



また、指導要領の改悪などによって、「日の丸・君が代」が強制され、画一的道徳教育によって管理と統制の教育がいつそうつよめられようとしています。教職員もまた教育内容と同様、徹底した管理と統制のもとにおかれようとしています。

それになりたいし、これまでも父母・労働者と教職員が一体となって、子どもや青年に明るさと豊かさをとりもどし、民主教育の確立と発展のために懸命な努力をいつけてきました。教育はすべての労働者・国民の将来にわたる永遠の課題です。そのためには、教職員が主体的にとりくむことは当然として、ますます広くかたく父母・労働者と連帯をつよめることが重要です。

日教組は、すべての父母・労働者とともに、憲法・教育基本法にもとづく反臨教審・国民合意の草の根教育改革、反核・軍縮・平和のたたかいを、全組合員の英知と力を結集していっそう強化することが求められています。

日教組は、これらの重要な課題を解決するため、日本教職員組合規約第一七条第七項の規定にもとづいて、「官民一体の労働戦線の全的統一を実現し、わが国一國一ナショナルセンターの完成をはたします」という「労働戦線の統一に関する件」(案)を提案します。

#### 〈提案事項〉

官民一体の労働戦線の全的統一を実現し、わが国一國一ナショナルセンターの完成をはたします。そのため、

(1) 日教組は第一五回首脳会談の合意事項である統一案起草委員会の結論「連合の進路」「運動の領域と活動のすすめ方」「規約」、ならびに総評提案の「統一ナショナルセンター発足にむけて」「国際自由労連加盟について」を支持し、全日本民間労働組合連合会(連合)と各官公労働組合との統一による新統一ナショナルセンター(日本労働組合総連合会―連合)に加盟することとし、九月に発足が予定されている統一準備会に参加します。

(2) 日教組は、総評提案の「総評センター設立方針」について」を支持し、これに参加することとします。そのなかで、これまでの総評労働運動の課題で、新しいナショナルセンターに直ちに継承が困難な課題(例、政治活動、国民運動、平和運動、県評センターの共同行動など)について運動を強化します。

(3) 地方組織の結成と運動については、これまで地方の運動に果たしてきた役割を重視し、県評・地区労働運動の主体性を堅持しつつ、従来の課題とたたかいを継続発展させます。

(4) 日教組は、産別組織としての主体性を堅持し、組織的力量をたかめつつ、臨教審路線を排し、憲法・教育基本法にもとづく国民合意の教育改革・反核・軍縮・平和・護憲など、日教組運動の重要な課題についてとりくみを強め、同時に新しいナショナルセンター、総評センターなどでのとりくみを重視します。

(5) 「統一労組懇」「全国教職員のあり方懇」が、産業別労働組合の組織原則に反し、日本共産党主導の「統一労組懇」を中心とする「階級的ナショナルセンター」の結成と、それへの参加ならびに「教職員組合全国連絡会(全国連絡会)」の結成を強行しようとしていることから、日教組産別としての統一的対応をひき続き求めていくと同時に、組織原則と組合民主主義の原則に基づき、組織的対応を強化します。

(6) 日教組は、労働戦線統一検討委員会、産別組織対策委員会を継続設置し、労働戦線統一完成に組織の総力を結集します。また、各県・高教組も同様の対応を強化します。

## 国労闘争前進のために

—— 国労をめぐる情勢と課題 ——

国鉄の分割・民営化以来、苦しい闘い連続であった。特に、修善寺大会以降の組織破壊、差別・選別攻撃は、組合員と家族に対して、筆舌につくしがたい苦悩と苦痛を与えてきた。清算事業団においても、JRにおいても、その組合員と家族の受けた精神的・経済的損害ははかり知れないものがある。

しかし、ここまでよく耐え、奮闘してきた。いつかは必ず、“国労にいてよかった”、“スジを通してよかった”といわれる日が来ることを信じて頑張ってきたのである。

いま、ようやく、展望のひらけるとさしかかりつつある。苦労の連続のなかから切り開いてきた展望である。この有利な情勢を具体的な勝利へつなげるため、総力を傾注した闘いが必要である。

### 一、有利な情勢

基本的には有利な情勢にある。地労委命令の集中、そして田中氏の職場復帰とマス・コミ、世論の動向、中労委の対応など全面解決を求める客観的条件は成熟しつつある。しかし、反面、JRやJR総連（労連革マル）の危機感をもった巻き返しや妨害も激しく、機敏な反撃と対策が必要となっている。また、労働戦線の再編成が進む時期でもあり、国労の闘争展開を複雑なものにしていることも事実である。

こうした情勢を充分にあまえ、正念場の闘いに臨むことが求められている。

(1) **地労委命令の集中とその影響** 七月二〇日現在、地労委命令四〇件、中労委命令一件など地裁緊急命令を含めて、労働委員会勝利の命令の流れは決まった。マス・コミも朝日の社説や地方紙一斉の社説、解説記事にみられるように、“JR不当労働行為批判”、“JRは労務政策を転換せよ”とその流れは、ほぼ定着したといつてよい。労働法学者七七氏の声明や六・一三シンポジウム（JR不当労働行為救済命令を検証する）、ジュリスト（実用法律雑誌）六月一五日号の稲葉、岸井論文など労働法学者、弁護士等を中心とする知識層の動向も注目される。

地労委命令は、組合員・家族に多大な激励を与えている。「命令」の学習の不徹底のため労働委員会闘争の意義を十分に理解していない弱点はあるにしても、「命令」の与えた影響は大きい。それは、JR総連や鉄産総連等他組合員や職制にも大きな心理的動揺を与えている。

労働委員会命令は、多くの学者、労働組合にも国労の闘いについて理解を拡げている。

(2) **JR・JR総連の動向** 労働委員会命令の集中は、マス・コミばかりか、財界、政府・自民党にも一定の影響をもたらした。JR労務政策転換への圧力となる可能性をもっている。だからこそ、JRやJR総連の危機感はその通り、逆に、彼らをして強硬姿勢に走らせている。しかし、JRが強硬姿勢をとり続けることによって、一層、労務政策転換の圧力をつよめることになるだろう。JRグループ内の対立、各社内の確執が、労務政策をめぐって亀裂を生じさせる可能性をもっている。

九一年株式上場を予定する本州三社においては、一層、労使関係の安定化が求められ、

労務政策の見直しが進められるであろう。

(3) **清算事業団当局の動向** 法律九一号は、来年三月末で期限切れとなる。当局は、「全員の再就職を完遂する」として、来年度は人件費を計上しないこととしている。しかし、実際には再就職の完遂に自信がなく、「就職あつせん」のアルバイトづくりに懸命である。「働く意思なし」キャンペーンも強まるとみなければならぬ。

いずれにしても、法律九〇号による身分(清算事業団職員)は残るのであるから、政府、当局もなんらかの対応策が迫られることは必至である。問題は、全面的解決要求を掲げて闘う国労の闘争展開にかかっており、彼我の力関係によって、当局の動向が決つてくると見なければならぬ。

(4) **政治情勢と政府・自民党の動向** 消費税、リクルート疑惑を焦点にして、政局は参院における自民過半数われなど混迷を深め、消費税廃止、衆院解散総選挙など、激動の時期を迎える。この政治情勢から、政府・自民党が「J R問題」に本格的にかかわることは困難であろう。特に、清算事業団の雇用対策については、運輸省、労働省とも積極的な姿勢が見られない。政治的空白状態が続けば、その傾向は一層強まると見なければならぬ。

(5) **中労委の動向** 地労委がかかえる事件は、全国で年間五五〇件前後といわれる。国労だけで二〇〇件を数えるというのは、まさに異常な事態である。しかも、そのほとんどが、今年中に中労委に集中するのである。中労委の審査能力をはるかに超える件数が押し寄せることになる。

加えて、北海道・九州の採用差別事件など、中労委が「命令」を出すには重い事件である。しかも、清算事業団問題は、来年三月末という期限がある。

これらの事情から、中労委が一括和解に動くことができる。

九月七日、八日の北海道採用差別事件の審問終了と九州の審問時期が、当面の焦点となり、秋から年末にかけて、中労委における大きなヤマ場を迎えるものと想定される。

## 二、中労委が焦点に

(1) 地労委命令の積み上げと中労委集中という事態は、中労委をして全面一括解決へ動かざるを得なくしている。それが、「和解勧告」であれ、「和解交渉」であれ、中労委を舞台にした厳しい攻防になることが予想される。

この場合、国労として、全面一括解決の態度を鮮明にして、「要求」を明らかにすることが重要である。また、最大限の大衆行動やJ R職場における日常闘争の展開と闘争を持続させ得る主体的条件の確立が絶対必要である。

労働委員会闘争を中心にして、闘いによって築き上げてきた情勢を生かし、国労運動の展開を切り開くには、中労委における全面的勝利解決の道が不可欠であろう。

(2) 今日の政治情勢からも、「政治的決着」ではなく、中労委における全面的解決の道が必要になっている。中労委の判断、勧告が、J Rをして全面的解決へむかわせ、J R総連内革マル説得の材料にさせることも可能である。

(3) もちろん、J Rの現経営陣やJ R総連内革マルは、彼らの死活をかけた妨害に出てくることも想定しておかなくてはならない。国労の正義の闘いが、職場を基礎にした総力戦として展開され、妨害をはるかに超える闘いとならなければならぬ。

国労の闘いが持続性をもち、世論を動かし、中労委における「和解」へ全面的解決へ接近

するにつれ、J R内、J R総連内の矛盾は拡大する。

最も重要な点は、J R職場における国労運動の活性化であり、組織拡大である。一旦、職場における国労の運動が定着すれば、さらに運動にハズミが付き、地労委の勝利が職場の勝利に転化する。

(4) 今日までの闘いの到達点と情勢、彼我の力関係等から、中労委における「和解」は全面一括解決の方向こそが戦略的な展望を切り開く唯一の道である。もちろん、安易な妥協ではなく、持続した闘いを背景にねばり強い和解交渉を続けることが前提である。

その環境づくりとして、国会追及、波状的な運輸省・労働省要請、政党対策、支援共闘の組織化と運動、大量宣伝、マスコミ・世論対策、多様な大衆行動、J R会社側との団交強化、職場の取り組み等、一連の運動が不可欠である。

(5) こうして、全面的一括解決がはかられるなかで、清算事業団の雇用確保、J Rにおける不当労働行為を根絶する労務政策の転換が可能になる。国労敵視の労務政策が転換されれば、組織の急速な拡大を促し、労働条件改善の基礎的条件がつけられる。まともな労働組合の存続発展こそが、苦闘を重ねる組合員・家族の期待に応える道につながる。

### 二、組織拡大が重要なポイント

当面の基本は、臨時全国大会決定の全面解決要求とその実現のための総決起・総行動である。特に、討論を深める必要のある事柄は次の通りであろう。

(1) 全面解決を掲げて闘う意義、特に、情勢と闘いの到達点を確認し、J R職場の国労組合員を奮起させ、闘いを組織することである。

(2) 全面解決要求を一人ひとりの組合員の要求と結びつけ、過酷な労働条件を改善する闘いと一体のものとして意思統一をはかる。

(3) 闘いの焦点は、J R職場における労働組合らしい運動である。いつでもストライキが闘える国労の団結とこれを基礎としたJ R総連、鉄産総連組合員への影響力の拡大である。少なくとも、国労の分会、班等が、その職場の全労働者を代表する存在になることである。

同時に、総力をあげた組織拡大が重要なポイントになることは言をまたない。

(4) J R各社への抗議の集中と団交の強化、ハンスト、座り込み、集会、大量宣伝、他労組オルグ、東京集中行動、中労委傍聴動員、支援共闘の多角的組織化など、山積する運動課題をどう組織しきるにかかっている。

(5) これら職場と地域の運動を土台にして、ヤマ場にむけたストライキ態勢の確立である。部分ストから全面ストへ、闘いを積み上げ、全組合員が決起する状況をつくらなければ、秋の決戦に遅れる。例えば、十月から部分スト(含、指名スト)、十一月～十二月全面ストへの準備である。

(6) 北海道をはじめ成果をあげている自治体決議、地元出身国会議員への一斉要請行動、運輸省・労働省への波状的攻撃、国会追及など、政治的環境づくりに全力をあげる。

(7) 中央、地方における多角的な支援共闘づくりと一〇〇〇万個人署名、全国キャラバンの実施、そのための準備が主要な課題となろう。そして今一つ重要な課題は、一昨年の大会で明らかにした「連合に行かない、行けない組合の総決集」の道筋を国労闘争前進のためにも明らかにすることである。

## 「闘って良かった」といえる日をめざして

——昭和電工・千葉の仲間からの報告 (二)——

### 実態を明らかに、闘争の再強化を

私たちは自らの実態を明らかにすると同時に、退職者や配転者との継続したかわりを大切にしてきました。そこで私たちがつかんだのは、どこの職場に行っても配転・首切りの実態だし、抵抗しなければ身体はもたないし、はたらく続けることができない職場で働かされているということです。

**千葉工場に残った仲間の実態** 千葉工場においては、三年前のアルミ精錬全面スクラップ合理化によって、人員がギリギリに減らされた上に、さらにその現有人員によって黒字化がさげばれ(すでに黒字化達成)、さらなる黒字化のため四時間の早出・四時間の残業の強制が今なおやられています。一服もさせない職場づくり、終業のチャイムがなくても帰りづらい職場づくりが追求されています。その結果、昨年の昭和電工全体の休業災害八件のうち、労働者数が昭和電工全体の二%にすぎない千葉で二件も発生しているのです。ヒヤットとする体験は日常茶飯事。同様に下請企業の場合も、一三件のうち二件が発生し、今年の四月からは官庁から特安事業所に指定されるほどの安全無視がやられています。

職場の仲間たちは「もうやってられない、何とかしてほしい。昭和電工労組は何もやってくれない」「仕事についていけるのは耐えることができる者と、体力のある者だけだ。俺はもたない」と口々に訴えています。

「新中期計画」では、「従業員一人ひとりが従来以上に効率的に仕事をしていかねばなりません」「密度の濃い仕事をする体制」と述べています。つまり今よりもっと働けと述べているのです。このことが何をもちたらすのかはハッキリしています。私たちは三年前に結成した昭和電工千葉労組を通じて職場改善闘争において、第二合金職場の詰め所の設置をさせたり、仕事の引継ぎが仕事の五分前からやられている実態を職場で問題にして、ただちに中止させるなどの取り組みを進めています。こうした改善闘争を継続して取り組みの中から組織拡大と安全で安心して働き続けることのできる職場をめざしています。その成果はまだ組合員の拡大という具体的な形では現れてはおりませんが、昭和電工労組内の役員における御用派幹部に対する不信投票が年々増加していることに自信をもち、引き続き最大限追求しなければならぬ課題であります。

**配転者の実態から** 配転者は家族帯同、単身赴任、長距離通勤と形態の違いこそあれ、誰もが想像できない苦痛を強いられています。

「一度教えてもらった仕事が良くわからず、翌日に再度尋ねたら『まだそのくらいのこと理解できないのか』となじられ、訓練もあまりやらずに一人前として交替現場に配属された。一旦は退職を決意したものの、家族のことを思っただけでふみとどまりガマンし耐えている」

「毎日通勤しているが、朝早く帰りは遅くなる。身体はクタクタになって家族の会話もない。これが人間の生活なのかと腹が立つてくる。早く千葉に戻れるような取り組みをしてほしい」

「配転させられたときすでに五〇歳を超えていたのでやめようと思ったが、経済的な点

できびしくなるのでやむにやまれず応じた。千葉は好況のようだし早く帰ってほしい」と切実に訴えています。

こうした状況は一部の現象ではありません。この十数年間で一〇〇〇人が配転させられ、そのうち約二〇〇人が退職。配転できないために退職せざるを得なかった仲間を合わせると五〇〇人にもぼる仲間が路頭に放り出されてしまったのです。やはり「配転は首切り」だということを感じずにはおれません。

**退職者の実態から** 私たちはこの集会に向けて、アルミ精錬全面スクラップ合理化で退職に追い込まれた仲間のところに足を運びました。そこでつかんだのは、多い人は十ヶ所近くも職を転々とし、「いま働いている所も、もつとい所があればやめたい」という、未だに不安定な職場で働かされている仲間が圧倒的に多く存在しているという驚くべき事実です。ある仲間は――

「大企業の下請に働きだしてまもなく労災で左腕を失った。休職があけて元の職場に戻してほしいと申し入れたところ、ここでは使うことはできないといわれた。これじゃあどうやってメシ食っていけばいいんだ」

別の仲間は――

「いま働いている下請企業がT化学から引き上げることになり、一部はD化学の下請として残ることになるものの、誰を残すかで今もめている」と話しています。

このように私たちを待っているのはどこでも首切り合理化であり、これに抵抗していかなければたらき続けられないことはよりハッキリしてきています。

**仲間の抵抗からまなぶ** そういう職場の中で、誰もがただ黙って働いているのかというと、そうではありません。抵抗も始まっています。

千葉工場はこの一二年、設備の増強と新規事業の建設と、増設ラッシュで、ますます人手不足の状況になっています。製造職場の早出・残業の問題も、不満の声が高まる中で、末端職制からも「早・残をやめさせよう」という声があがっています。

また、千葉工場の新規事業の一つに「ハード・ディスク」事業がありますが、二〇一三〇人の人員が必要とされ、京浜地区から千葉への配転の人数が行われています。その中で、鹿瀬電工解散で京浜に泣く泣く配転した仲間が、今度は「千葉配転」の打診を受け、「今度は千葉で必要だから配転してくれだなんて虫がよすぎる」と抵抗しています。

あるいは、十年も前に千葉から配転させられた仲間も同様に「千葉配転」の打診を受け、「やっとな家族も京浜に慣れたのに、また千葉に配転だなんていい加減にしてくれ。それよりも希望者を戻せ」と抵抗しています。

また、三年前の合理化で退職したYさんは何回か職を変え、今はK地域のベニア板をつくる会社に就職。労働組合はなく、公休日に出勤しても手当てがつかず、同僚に組合をつくらうと呼びかけながら、労基署にも足を運び、手当てをつけさせています。そのYさんは――

「昭和電工にいたときはみんながいろいろ頑張ってやってくれた。しかし、今の職場は昭和電工のような大会社と違って条件も悪い。文句を言う人もいない。このままでは動まらない。組合運動なんかやったことはないが、みんながやってたことを知っているし、見てきた。だから今は仲間と飲んだりして組合をつくらうと話している」と。昭和電工にいたときは組合の「く」の字もないほどおとなしく、無関心だったYさんが退職後、中小企業で頑張っているのです。

こうした仲間たちが各々の職場で頑張っている姿を見て、原告団の一人は「頭をたたかれた思いだった。あのおとなしいYさんが、目立たなかったOさんが頑張っている。自分は一三年間もたたかい続けてきたのにまだ迷いがある。何のための一三年間だったのか。こんなことでいいんだろうかと反省させられた」と総括しています。

たしかに中小・下請の職場はきついし、権利も奪われています。しかし、これは中小・下請に限ったことではなく、大企業の昭和電工にしても黙っていたらどんどん奪われています。あらためて自らの働かされざまから、たたかうことの意義を再確認させられました。こうした討論の中から「昭和電工に頭を下げさせなくちゃ気がすまない」という決意があらためて原告から出されています。

そして、それぞれが休みづらい職場を変えろ工夫をしながら休み努力をし、家族とともに抗議行動を取り組んできました。闘争とアルバイト、闘争と生活は一体であるという思想に高める努力も一層求められています。

私たちが苦しければ苦しいほど敵も苦しいはずだ。だからこそ「敵より一日長く」たたかい続けるしかありません。この時間とたたかい、自分とたたかいに打ち勝つことこそが、勝利への鍵でもあります。

#### 今後の闘争と展望

私たちは今日まで、多くの不充分さをかかえながらも闘争の基調に沿って、裁判の勝利と、労働組合の拡大・強化を目指してたたかい続けてきたし、今後もより一層そのことを追求しなければなりません。

昭和電工をめぐる情勢、とりわけ「和解」をめぐる動きは前述したように、昭和電工労働者のさらなる配転・首切り・労働強化を狙うものである以上、それに抵抗し、押し返すことのできる組織を本気でつくりあげなければなりません。

「たたかえばたたかただけのことはある」ことは、今回の会社側の「和解」の動き（一定の譲歩）を見ても明らかであります。この一定の譲歩を更に大きく譲歩させるためには、私たちが自身の更なる一歩が求められています。その条件はあるということを確認しながら、外からも内からも昭和電工資本を包囲していくたたかいを前進させていきたいと考えられます。

支援労組や多くのたたかう仲間の御協力を得ながら新たな気持で「敵より一日長く」たたかい続けようと思います。全国の仲間との交流をさらに強め、たたかい続けてきて本当に良かった」と言える日のために。

#### 仲間の皆さんへ！

現在、昭和電工村田社長あての署名活動をしておりますので、ぜひご協力をいただきましたと存じます。

#### 〈お詫びと訂正〉

『国労だから…』『女だから…』そんな差別は許さない」（本誌第四〇九号）に誤りがありました。お詫びして訂正します。

一〇頁九行目、金田麗子さんは、塩屋崎あき子さんです。

## ◇ 投稿 ◇

## 闘いこそが勝利への確信を生む

新潟の仲間の闘いに学ぶ

新潟の仲間の皆さん、ご苦勞さま

志苦（社会） 六一万一九八六票（得票率、四二・八八％）、金子（自民） 六万五〇八六票（同四六・二二％）、長崎（共産） 一四万一六二票（同九・八二％）。

全国注視の新潟知事選挙は、すでに御承知のように、結果としては四万三二〇〇票差だった。しかし、参議院補欠選挙の結果とつなげて考えると、実質的には、志苦候補が圧倒的県民に支持された、といえると思う。

参議院補欠選挙の大勝利（八万票の大差）をかちとった新潟の仲間の皆さん、たいへん御苦勞様でした。心より敬意を表します。新潟の社会党、とりわけ、党建協に結集する仲間の皆さんの献身的な日常闘争の積み上げがこのような大勝利をもたらしました。

たしかに、「リクルート、消費税、消費問題、宇野スキヤンダル等々」。自民党には逆風、力が党にとっては「追い風の条件」もあつたことは事実です。しかし、私たちは、これらの条件（追い風）に単に乗っかってあまい選挙闘争をやつてこなかつた、社会党新潟県本部の賢明なる指導部と党建協を中心とする仲間の皆さんの闘い・努力を評価し、心より学ぶつもりでいます。

朝日「社説」に思う

一九八九年六月六日付けの「朝日新聞」は社説「薄氷の勝利」が示したもので、次のように報じました。

「野党側に期待を寄せていた何人かの有権者から『社会党と共産党が共闘すれば勝てたのに』という嘆きを聞いた。得票数を単純に合算すれば、一〇万票近い差で野党は勝てたのだから、無理もない。

いま、社会党と共産党の間の路線的、組織的対立は深刻である。かつての社共共闘のような関係を期待するのは不可能だ。しかし、度を越した他党攻撃は慎む余地があると思う。自民党批判より社会党攻撃に重点をおくような共産党の態度は、野党支持者がっかりさせているのではないか。」

私たちは、ここで、商業各紙が「社会の真実を報道する使命がある」とする、マスコミ機関の意図（時には、「政府・自民党、独占資本」の本音をも代弁する）、本質をしっかりと見抜かなければならない。

新潟の仲間の総括から

新潟の仲間たちは、知事選挙について、次のような（中間）総括をしている。

「絶好の革新知事誕生の機会を逃してしまった最大の原因は革新統一が出来なかつたことにある。新潟は社会党、共産党による革新統一の実績を比較的積んでいる。しかし、今



回統一ができなかった主要な原因に労戦『統一』問題がある。社会党は『県評・県連合』の意向を考えた取り組みにならざるを得なかった。共産党とも話しをしながらも社公民に重点を置いた調整になった。一方、共産党は、今秋の階級的ナショナルセンター確立にむけて、自社公民『なれあい』政治批判に重点を移していることもあり、独自候補擁立は如何にしても避けられない選択だった。

労戦『統一』の問題は、労働運動、政治運動においても大きな影を落としている。そして、労働者にもちろんのこと、結果として勤労県民にも犠牲が転嫁されている。』

「共産党の各党に対する批判の自由は保証されているとはいえ、度を過ぎた社会党批判は目に余った。社会党は批判をされても仕方がない面もあるが、批判のための批判もあり（小林県委員長『社会党は県政批判をしなかった』等）、自民党からより社会党支持者を共産党に奪うという感じさえ伺えた。歴史的に総括されている社民主要打撃論であり、誤りである。

結果として、社会党ブロックの共産党に対するアレルギーはますます強くなり、今後の共闘を困難にしている。結果として勤労国民の利益が損なわれてしまう。『除く共産党』は、共闘のポジションを如何にしても右に寄せてしまう。私たちは、感情的な共産党批判に陥ることなく、『除く共産党』に反対し、社共の共闘に引き続き努力していかなければならない。』

傍線部分は、少し独特な表現になっていますが、逆にきわめて鋭く、しかも、わかりやすく私たちの立場・基本路線（真の敵は誰か！）を明らかにしています。

『党建協ニュース、No二三号』（八九年五月二五日）では、「反自民の原則に立ち返ろう」として、「ノーモア・千葉、ノーモア・名古屋」を強烈に訴えていました。今こそ、反独占・反自民の原則に立ち返り、参議院福岡補欠選挙、新潟知事選挙・参議院新潟補欠選挙闘争等々にしっかり学び、教化し全国に正しく拡めていかなければなりません。

### 「基本路線」転換に反対

そのためにも、この間の社会党をとりまく情勢の中で、八〇年代以降の現実、「社公協定（合意）」、「新宣言」、「組織改革（悪）」、「重大な「労戦『統一』問題」、「基本路線転換の動き」に対して、毅然たる態度、「新宣言」路線反対、「連合」（路線）反対、「基本路線」の転換反対をキチンと堅持しなければなりません。

こんにち的に社・共論争のもとになっている「社公協定」（八〇年一月）にしても、共産党から「これ（社公協定）以降、社会党は右転落した」という厳しい批判に対して、「受け身」ではなく、主体的に社会党員としていかなる見解と態度を持ち続けているのかというところが問われなければならない。「有（※悪）名無美化」（八〇年代前半に「連合政權」樹立。しかし、現在は八九年である）している。

全国の仲間の皆さん、日本社会党の階級的強化（「新宣言」路線反対、「基本路線」の堅持）と階級的労働運動の構築（「連合」反対、「全労協」への結集）に向けて、いま新たな条件がつくりだされ、まさに「正念場」を迎えています。厳しい苦しい困難な状況を克服するために、職場・地域で一生懸命頑張ります。

（S・M）

## ◆ 読者からのおたより ◆

連帯する会に入会を 国労が一七日、第五三回臨時大会を開催し、清算事業団に配属された組合員の雇用確保や一連の不当労働行為救済命令の実行を掲げ、全面一括解決を目指す闘争方針を確認した。来年三月末に期限切れとなる清算事業団の雇用確保、配属・出向・差別や一時金、昇格の差別、安全輸送の確立等、今後の課題はたくさんある。我々も国鉄闘争を共に闘い、支援していかなければならない。だれでもできる行動は、「連帯する会」に入会することである。 (医療労働者・K)

田中氏、整然と職場復帰 東京地裁が出した「緊急命令」により、原職の「内勤車掌」復帰を勝ちとった国労新宿車掌区分会、田中博さんは、国労八王子支部の激励に見守られるなか、七月一七日に整然と職場復帰をおこなった。田中さんは「復帰する内勤職場には国労組合員はおらず、不安はある。だがそんなことはいっておられない。みなさん方の多くの支援や激励がたいへん励みになっている。精一杯がんばります」と決意を表明。

田中さんは朝八時すぎ、職場へ入ったが、会社側は田中さんを入れたあと、支部役員や多勢の報道関係者をシャット・アウト。あげくのはてには、新宿地区指導センターの暇人連中がごっそり駆けつけ、報道人と「入れろ」「入れない」と大騒動になり、異常なJR会社の施策をはからずも暴露してしまった。 (国労・H)

販売活動にご協力を 私は国労清算事業団闘争本部の書記をしております。JRのすさまじい「国労つぶし」攻撃にもかかわらず、国労は闘いつづけています。田中さんが原職復帰を勝ちとり、嬉しくって嬉しくって涙が出ました。しかし決定的な闘争はまさにこれからです。今、この闘争を勝利させるカンパの意味もふくめて、「こころうラーメン」はじめ、そうめん、いかの塩辛、昆布、小城ようかんなど全国一流の物品をそろえ、販売活動に取り組んでいます。どうかお求めくださって、私たちと連帯してください。心からお願います。申し込みや問合せ先は、東京都千代田区丸の内一八、国労東京事業センター、電話〇三一二三一一七八二〇です。 (東京・菅原須磨子)

いよいよ参院選突入 いよいよ参院選突入、目前。党への期待の強さと裏腹の主体的力量の弱さーわが総支部はレベルは高いとの自負があるのですがーのギャップで、四日間寝込んでしまいました。その分、不足していた読書ができました。勤労者の期待はわが路線にあります。がんばりましょう。 (千葉・C)

保守王国で 一年分の前納とします。よろしくお願いします。保守王国で闘い続けられるようがんばっていきつもりです。 (青森・Y)

都議選結果に勇氣 参議院選の真最中です。都議選での社会党の躍進に、たいへん勇氣づけられています。客観的条件は社会に有利ですが、主体の遅れが感じられます。参院選の勝利は欠くことのできないものと思います。ともにがんばりましょう。 (埼玉・T)

広域移動から三ヶ月 広域で北海道から出てきて三ヶ月。二年前の二月一六日の振り分け、事業団での二年間の苦悩の日々。そして悩み苦しんだ末、闘う場、生活の場を求めて広域の結論を出したことが、昨日のように想い出されるこの頃です。こちらで待っていたのは相変わらずの国労攻撃と出向でした。二・一六、今までの扱われ方、そして出向等の恨みを晴らし、労働者が安心して働け、生活できるまで闘い続ける決意を、今の攻撃のなかであらたにしているところです。 (茨城・S)